【カボチャ色の魔女ディ・ベララ】

逆野　銅鑼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【カボチャ色の魔女ディ・ベララ】

【Ｎコード】

Ｎ６１５８Ｏ

【作者名】

逆野　銅鑼

【あらすじ】

ハロウィン記念の童話となっております♪

『カボチャ色の魔女ディ・ベララ』

魔女ディ・ベララの髪は夕日のような橙色
目が覚めるような明るいオレンジ

紫髪の魔女が言った

「そんな派手な色、魔女に似つかわしくないよ
魔法の呪文で変えておしまい」

緑髪の魔女が言った

「そんな明るい色、魔女らしくないわ
秘密の薬で変えてしまいなさいな」

黒髪の魔女が言った

「そんな色をした魔女は私たちの仲間じゃないよ」

ディ・ベララは何と言われても、その髪の色を変えようとはしなかった

仲間外れにされても、のけ者にされても
蔑まれても、疎まれても
彼女には髪の色を変えない理由があった

三日月が白く笑う夜
色の無い小道を賑やかに
ジャック・オー・ランタンを引き連れて
ハロウィンの王はやってくる

ディ・ベララはハロウィンの王を愛し
ハロウィンの王もディ・ベララのことを愛していた
毎年、その夜にしか出会えないけれど

「君はとても素敵な髪をしているね」

ハロウィンの王はいつもディ・ベララのカボチャ色の髪を褒めた
ディ・ベララは嬉しくて嬉しくて
恋人が褒めてくれる髪を撫ぜながら、一人呟いた

「彼が愛してくれる髪を、あたしは守らなきゃいけないわ」

年を重ねる毎にディ・ベララの愛情は募った
いつだって独りきりでも彼といる
その瞬間こそ永遠だった

愛情は募り　募り
本当に恋人と永遠に一緒にいたいと考えるようになった
ある年、ディ・ベララはその想いを告げた
しかしハロウィンの王は悲しそうに首を振った
「私は亡者たちと共に、あの森をさ迷わなければならない
　この月が笑う夜にだけは、この森に来ることができるのだ」

ディ・ベララは考えた
どうすれば、彼と一緒にいられるだろうと

ある夜　垂れた木に首を吊ってディ・ベララは死んだ
恋人が愛してくれた髪を守るために
顔に髪を垂らしたまま

彼女の魂は亡者となって
ハロウィンの王に連なるジャック・オー・ランタンの一つとなった

ジャック・オー・ランタンはさ迷える灯
魂が消えるまで燃え続ける

そしてハロウィンの王の心は
死んだ者を忘れるように出来ていた

白い三日月が笑う夜
小高い丘で揺れる枝を
ハロウィンの王は笑いながら眺めた

「見よランタン共、あの枝はお前たちに良く似ているぞ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6158o/

【カボチャ色の魔女ディ・ベララ】

2010年10月31日15時12分発行